



2 年目のシーズンと父の死



1964 年 7 月から新プログラムが始まるので、research fellow の一部が去り、新しい人が入ってきた。なお、この時期から新たに大阪市大生理学の木下喜博助教授が Dameshek 先生のラボで research fellow として働くことになり、御家族で来られケンブリッジに住まわれることになった。先生はリンパ球分離を御専門とされ、胸腺や免疫のグループで仕事をされることになったが、私はこのときが全くの初対面であった。

私の実験助手はボストンにある Northeastern University の学生に変わった。この大学の年数は普通より 1 年長くなるが、2 人 1 組になって、1 年ずつ同じ施設で実験助手として働いて学資を得るという仕組みになっていた。なかなか実用的な制度であると感じたが、現在の日本でもこのような制度はあるだろうか。

病院では毎日、日本と異なって医師たちにひっきりなしに「Dr. XX, 5326 (電話番号), Dr. YY, 2145」と交換手からの院内呼び出しの音が響いており、該当の医師たちが慌ただしく廊下にある電話に駆け寄ってダイヤルをまわしていたが、それが今シーズンから廃止された。相当コストはかかったらしいが、病院の臨床に携わる全医師に PHS のような器具が配られ、該当医師にのみ連絡が来るようになったのである。したがって、連絡を受けた医師だけが最寄りの電話から知らされた番号に電話すればよくなった。このこと自体に大いに感心したが、興味があったのはカンファレンス中で、レジデントやインターンが教授に質問している最中でも呼び出されたときは、医師は質問も中断して無言で中座してしまうのであった。この辺りにも日本との文化の差が感じられた。

7 月の初めに母から珍しく私に速達の航空便が届き、「父が体調不良で兄の勤務している大学病院に入院したが、胃がんが肝臓にまで転移しているのがわかったので手の施しようがない。父には病名を知らせずにおくから、お前は帰国する必要はない。そのまま米国で仕事を続けなさい」と書いてあった。実際に当時は帰国する旅費も手元になかったが、とにかくそのまま受け入れた。しかも、本人に病名を知らせてないので手紙にも当たり障りのないことを書くしかなかった。また、私は米国へ到着してから一度も国に電話をかけることもなかったので、ましてや今更電話はできなかった。

7 月末日に手にした 2 年目の初めての給料は月 400 ドルに増加していて、とにかく米国で普通に仕事ができただと実感できた。また、1963 年 7 月 1 日～1964 年 6 月 30 日まで New England Center Hospital の Research Fellow in Medicine

本コーナーのタイトル「Be Ambitious!」はウィリアム・エス・クラーク博士の名言“Boys, be ambitious like this old man”から拝借しました。「未来を自ら切り拓くべし」という後進への強い期待の意も込めて、長年に渡り、血液学の世界で活躍して来られた名誉会員の先生方から現役の先生方に向けた熱く且つ含蓄豊かなメッセージをお届けいたします。



東京医科大学名誉教授
第 17 期日本学術会議会員
損保ジャパン日本興和診療所
外山 圭助

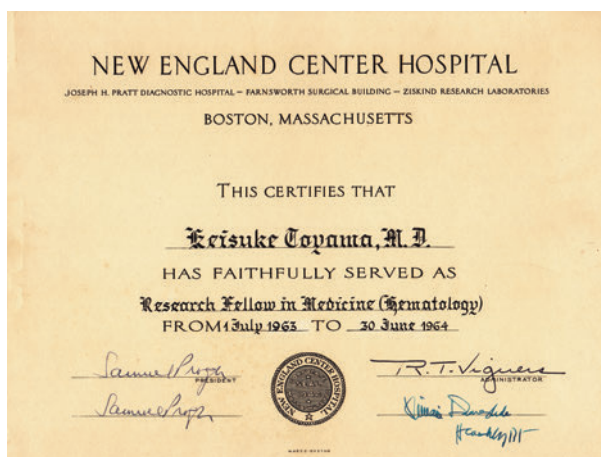


写真 9. New England Center Hospital の Dameshek 教授署名入り fellow 修了証明書

(Hematology) として勤めたという Dameshek 先生の署名入りの証明書をもらった (写真 9)。

8 月半ば母から父が 7 月 6 日に 67 歳で亡くなって、葬式も納骨もすべて兄とともに済ませたという知らせが届いた。私は 16 歳で、仕事の関係で関西に住む父母のもとを離れ、東京で兄と 2 人で学校に通ったので、両親と会えるのは学校が休みの春、夏、正月の年 3 回のみであった。しかも、医師になってからは春休みがなくなり、正月休みも短くなったので、ますます自宅で過ごす日が減少していた。私が留学をすることになったとき、父は大変喜んでくれた。そして、羽田を発つ数日前に父母は上京して来て、空港で見送ってくれたのだった。飛行機に乗るときに父が「元気だな」と言ってくれたのが最後の声であり、飛行機の窓から送迎デッキの上で手を振ってくれた姿が、私が見た最後の父であった。この日はさすがに気分が落ち込んだが、寄宿の部屋で独り父の冥福を祈った。

次の週にはラボの人たちの誘いで 1 日休暇を取って、ケネディ大統領の別荘のあったマサチューセッツ州南部の Cape Cod に行き Denismet という町で夜遅くまでさわいで、別荘に泊めてもらい 3 時間ほど睡眠をとって、一人だけ車でラボに戻って仕事をした。8 月末に 1 週間の夏期休暇が取れたので、病院の Cancer Research の Prof. Fishman のラボで研究されていた九大薬学部の加藤敬太郎先生と、MGH に留学してきた私の同級生と共にケベック、モントリオール、トロント、ナイアガラなどカナダ東部を車で旅行した。最後に Buffalo, NY の Rosewell Memorial Institute に慶應大内科の先輩を尋ねた。

Jimmy fund と ボストンにおける楽しみ



ボストンで感銘を受けたのは Jimmy fund である。この fund は 1948 年に白血病の Jimmy 少年を助けようとボストンで呼びかけられた基金である。秋になって映画館に映画を見に行くことが多くなるが、いつも映画の休憩時間の前後に短い映画が上映される。それには戦前の米国プロ野球、大リーグ Boston Red Sox のスタープレイヤーで打率 4 割 6 厘を記録し、当地の英雄となった Ted Williams が画面に現れて、Jimmy fund への募金を呼びかける。そしてこの画面が終わると明かりがついて、帽子が客席に回ってきて観客のそれぞれが、なにがしかの金額を寄付するようになっていることだった。このように常に大衆にがん対策を啓蒙しているのには感心させられた。このほかにもボストンでは Jimmy fund による医学講演会がしばしば行われ勉強もできるようになっており、ボストン留学中はこの講演会によく出席した。

New England 地方の秋の紅葉は誠に素晴らしい。9 月の末の週末はニューハンプシャー州は紅葉見物の車で渋滞する。また、10 月の初めにはマサチューセッツ州の西部でも紅葉が素晴らしくなる。北国特有な急激な寒さと空気が澄んでいるためか、このほか美しいので、週末はこのような景色を大いにエンジョイした。

ボストンは有名な美術館もあり芸術の都でもあることは知られている。私はもともと絵画は大好きであったが、音楽に関して日本では N 響の定期会員になったこともあったが、なかなか音楽会にゆくチャンスがなかった。しかし、ボストンでは 10 月から翌年の 5 月までボストン交響楽団の定期公演会が symphony hall で行われる。さらに、7 月にはマサチューセッツ州の西端の Tanglewood という素晴らしい景色のところで、毎週末演奏会が開かれる。しかも、このときは有名指揮者、演奏家が招かれて共演する。また、ボストン中心のチャールズ河畔でも音楽会が開かれる、というように音楽を聴く機会に非常に恵まれている。当時のボストン交響楽団の常任指揮者は日本であり知られていないラインスドルフという人に代わっていたが、前常任指揮者のシャルル・ミンシュ自身が指揮をしたり、ハリウッド映画でおなじみのストコウスキが指揮をすることもあった。また有名なリヒター、ルビンシュタイン、パン・クライバーンのピアノ演奏を、あるいはオISTRAフやアイザック・スターンのバイオリン演奏を生で聴くこともできた。また、病院のすぐ近くにある Music Hall では米国各地や外国からの有名なオーケストラ、バレエ、オペラなどが上演され、カラヤン指揮のベルリン交響楽団の

演奏、レニングラードバレエや英国ロイヤルバレエ、NYのメトロポリタンオペラの公演など鑑賞することができた。さらに、近くには劇場もあって演劇も上演されるので、実際にピピアン・リーの出演した演劇も見ることができた。その上、日本と異なっ てこれらの入場券は簡単に入手できた。新聞に演奏会や演劇の広告が載ると、希望の公演日と、希望の席すなわち balcony (2 階席) あるいは floor (1 階席) と、希望の人数を記して、personal check と一緒に郵送すると、確実に入場券が手もとに送られてくる。このほかスポーツ分野では MLB の Boston Red Sox の野球場もあり、Yankees のマントルやマリスのプレーも見られた。冬季には NFL の Patriots, NHL や NBL の試合があり、実際に Celtics の NBL 7 連覇を見ることもできた。

パーティで知ったラボの医師たちの話題の豊富さは、このような経験から得られたものであることが理解でき、自分もこの町に住むことができたことを感謝した。しかし、同時に日本の医師の多忙な生活は、ストレスが多すぎると感じた。

1964 年の秋から冬



この年の 10 月にはアジアで初めての東京オリンピックが行われたが、当地では大統領選挙と重なって、人々やマスコミの関心もそちらの方にひきつけられていた。したがって、時差の関係もあるうが殆どオリンピックに関してはテレビでも報道もされないし、職場でも話題にならなかった。女子バレーボールで日本が金メダルを取って、日本中が沸いたらしいが、ボストンにいと殆ど知り得なかった。このオリンピックで米国は世界一多数のメダルを取っているにもかかわらず、現在の日本の過熱ぶりと比較すると、きわめて対照的であった。一方、大統領選挙に関しては連日ラボでも話題が出ない日はなかった。ある日テレビを見てみると、コマーシャルのように、水の上に板で作られた合衆国が映し出され、鋸が合衆国の東の部分を切り離して水に落とすところが映し出された。この間、鋸の板を引く音のみが聞こえ、何のナレーションもなく、最後に“反対する部分は要らない”といったような言葉が発せられた。これは共和党候補者の陣営のキャンペーンだったらしいが、非常に驚いた。結果的にこのときの選挙は民主党の現職リンドン・ジョンソンが大差で勝った。

11 月 15 日～17 日に ASH meeting がシアトルで開催された。Dameshek 先生が会長であったが、会場が米国西岸とあって教室のほとんどの医師たちは残念ながら参加できなかった。この年の感謝祭の日にはラボの研究助手が Kosmos と私を自宅に招いてくれたので、前年同様七面鳥をごちそうになった。この月の末には 1965 年度も私の New England Center Hospital の契

約が延長されることが決まってうれしかった。

12 月には週末に NY を訪れた。丁度街はクリスマスシーズンたけなわで、ボストンより華やかなイルミネーションで飾られ、非常に印象的だった。帰国後、年を経て ASH に出かけ、このようなデコレーションを各地で見る度にこのときのことが思い出された。

この年の暮れの Hematology のパーティでは前年同様 Blood の年間購読券を Dameshek 先生からいただいた。

1964 年の 12 月のある日、ラボの私の所へ、いわゆるケーススタイルの白衣を着た日本人の医師が訪ねてこられた。顔を見て片山勲（後に埼玉医大病理教授）先生であることを知って驚いた。私が慶應大学病院で知っていたのは、米国帰りの脳神経外科医であったからである。先生は 2 回目の渡米で Tufts 大学の病理のレジデントとして Boston City Hospital にお勤めだったが、希望して New England Medical Center にローテートしてきたとおっしゃって大変懐かしがって下さった。先生は後にこの当時は leukemic reticuloendotheliosis と呼ばれていた hairy cell leukemia の白血球細胞内の ribosome-lamella complex を発表して有名になられた。

当時のボストンの冬は厳しく、気温は常に零度以下でマサチューセッツ工科大学の前あたりで最も川幅が広くなる Charles River がすっかり凍ってしまった。

初めての学会発表



1965 年 2 月の終わり頃に 4 月の学会で私が発表することが決まった。私にとって学会発表は日本で 1 回のみで、ましてや英語では初めてのことであるので、Mitus 先生が発表の原稿のチェックや発表の仕方を教授して下さい。特に注意されたのは英単語の語尾をはっきり発音すること、R と L の発音の差に注意することなどであった。その後英語の発表にはこの教えを守っている。

4 月の初めに Federation of American Society for Experimental Biology の学会に発表するために、Cancer Research の加藤先生と Atlantic City, NJ へ自分の車で出かけ、現地で Mitus 先生と合流した。4 月 10 日の午前の部で初めての演者としての発表を行った。質問にも答えることができ、発表は無事終了した。この学会では会場がボードウォーク沿いのそれぞれのホテルであるので、全米のいろいろな所から来ている研究者たちは、ボードウォークを歩いていることが多い。私も同じラボからの医師にも会ったし、慶應大学から米国に留学していた基礎の先生、臨床の先生とも会うことができた。その夜は例のごとく

Dameshek 先生と奥様を囲んで教室から来ている全員と会食があった。また、会期中には笠倉先生と Captain Stern's で会食したのは言うまでもなかった。

4月19日はボストンでは、米国独立の折、ボストン近郊の Concord に集結していた独立派の義勇軍を、英国軍がひそかに襲おうとしていたのを知った Paul Revere が、馬を駆って先回りして義勇軍に知らせ、そのおかげで独立軍が大勝利した事実を記念して州では4月第3月曜を Patriot's Day として休日にしており、ボストンマラソンはこの日に行われることになっている。前年はゴールよりも大分遠い Brookline で見たが、日本人の活躍は見られなかった。この年はゴールのプルデンシャルセンターに近い Commonwealth Ave の街角で曇天のもとレースを見た。人ごみの中に立っていると次々とランナーが見えてくるが、日本人ランナーが好順位でやってきた。その後も次々と上位に日本人がやってきた。観客の間から「日本人だ」「また、日本人？」という声が聞かれた。このときは重松森雄というランナーが優勝し、その他何人かの日本人ランナーが好成績を上げたので、やはり日本人として誇らしかった(写真10)。近年、ボストンマラソンのときにテロがあったことは記憶に新しいが、この Boylston St の現場と私の見物していた道端はかなり近かった。あらためて平和のありがたさを感じている。

5月の初めに毎年 Atlantic City, NJ で行われる Journal of Clinical Investigation の meeting に出席することができることになった。この会はかなりレベルが高くここで発表できることは名誉であって、この年は教室の誰かが発表する機会を得たが、誰だったか思い出せない。とにかくこの会に出席することが許可されたので、教室の fellow の車に同乗させてもらって出掛けた。学会で私の1年後から Gainseville, FL のフロリダ大学に留学していた血液研究室の同僚と会ったので、夜は Captain Stern's で久しぶりの再会を祝して会食した。翌日の夜は毎回恒例となって



写真10. 1965年ボストンマラソン優勝者

いる Dameshek 先生と教室一同のパーティがあり、Captain Stern's Restaurant のロブスターディナーは Atlantic City の学会の記憶と結びついている。

Prof. Dameshek が ラボを去られる



この頃から Dameshek 先生が今年で New England Center Hospital の Hematology の director を引退されるという話が伝わってきた。そこで1965年の先生の誕生日を祝う会が名門の Somerset Hotel で盛大に行われることになった。このホテルは Mass Ave と Commonwealth Ave のコーナーにあり、季節は忘れたが毎年社交界にデビューする女性のパーティが催された。その季節には Boston Globe という土地の有名新聞の見開き2面を使って白いイブニングドレスを着た若い女性の写真が並び、それぞれ本人の名前と Mr & Mrs だれだれの御嬢さんであり、本年社交界にデビューすると紹介された。Dameshek 先生のパーティはここで行われ、教室の全員が夫人同伴で出席した。日本の何かのパーティのように形式張ったものではなく、和やかに淡々と進められた(写真11, 12)。

6月に入って Baldini 先生も Brown 大学に新設される医学部の教授として Pawtucket, RI へ去られることになり先生の送別会が Harvard Club で行われた。このクラブは確か Harvard の医学部の敷地内に存在しており、重厚な感じの部屋で dinner party の形式で行われたと記憶しているが、写真もないので詳細は思い出せない。この月末に教室で回診の後にコーヒーだけのお別れ会がささやかに行われた。

なお、例年行われる clambake party が前年と同じ場所で催さ



写真11. Prof. Dameshek の Hematology director 最後の誕生日会、教授御夫妻と



写真 12. Prof. Dameshek 誕生会：木下喜博先生と共に

れた。このときは同じ教室の Kosmos と木下先生御一家を私の車に乗せて Castle Hill へ行った。そこで、Mitus 先生御一家や九大の加藤先生と一緒に前年同様にロブスターを食べ、浜辺で遊んだ。

3 年目のシーズンへ



1965 年 7 月に入ると Dameshek 先生は NY の Mt Sinaï Hospital に新設される大学医学部の準備のために New England Center Hospital を去られ、代わって Hematology と Blood Research Laboratory の director とし て Prof. William H. Crosby がワシントンの Walter Reed 陸軍病院から赴任してこられた。Crosby 先生は iron metabolism, PNH, 小腸の intra-luminal biopsy, hemochromatosis の分野で有名であった。さらに、元 Dameshek 先生の hematology fellow でもあったので、お二人の引き継ぎというのもほとんど自然に入れ替わったという感じであった。また、新たに Assistant Professor として hemochromatosis を専門とする Louis Weintraub 先生と新しい clinical fellow や research fellow が教室に加わった。この中に後に私の親友となった Dr. Lung T. Yam (後に hairy cell leukemia の tartarate resistant acid phosphatase で有名。Louisville 大学教授) やドイツ人の Dr. Peter Lorbacher (後に Bonn や Wiesbaden 大学教授) が入っていた。一方では親しかった人たちが次々と去っていった。

教室の雰囲気は当然のことながらかなり変わった。土曜日の Hematology のグラウンドはなくなってしまって、週休 2 日になった。これは Crosby 先生の宗教上の理由だという話を聞いたことがあるが、真偽のほどは明らかでない。

その他の教室のスケジュールは大体同じであった。Mitus 先

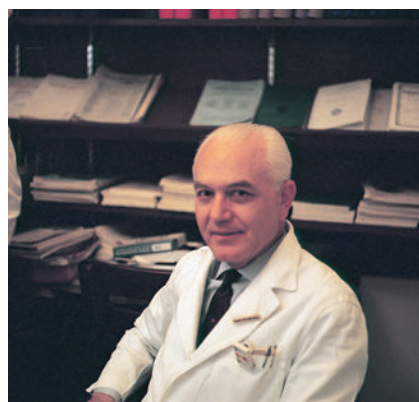


写真 13. Baldini ブラウン大学教授

生、Schwartz 先生は残られたので変わらない部分もあるが、discussion のテーマは少し変わって鉄代謝や hemochromatosis の治療、溶血性貧血などが多くなった。

いつだったか Schwartz 先生が一部の fellow たちを自宅に招いて下さった。その席上、先生がこの顔ぶれは何だと思ふと皆に尋ねた。誰も答えられなかったら、Schwartz 先生が「来ていない人は AD fellow, すなわち after Dameshek fellow だ。ここにいるのは BC fellow, すなわち before Crosby fellow だ。我々は彼らとは違う」と冗談めかして話されたことがあったが、特に Dameshek 先生と親密だった Schwartz 先生の案外本音かなと思った。

7 月か 8 月だったか Baldini 先生 (写真 13) に新しいラボを見に来ないかと誘っていただいたので、Pawtucket, RI の Brown 大学を訪ねた。Baldini 先生の所へは New England Center Hospital で働いていたイタリア人の fellow 一人がついて行っていた。そこで Baldini 先生から「来年は自分のラボへ来て働かないか」といわれたので、私は血小板の仕事はやったことがないと答えると、先生は「大丈夫、すぐ慣れるよ。君が hard worker なのは New England Center Hospital でよく知っているから。給金も必ず今より上げるから」と熱心に誘っていただいた。その後、先生にラボを案内していただいたが、先生はラボの人たちに今度来ることになった Dr. Toyama だと私を紹介されたのには驚いた。ボストンに帰っているいろいろ考えてみた結果、もし病院を移って新しい仕事をするにさらに 2 年位かかるかなと考え、ボストンに残ることにした。もしこのとき Baldini 先生のお誘いの通りにしていたら、広島原研の蔵本淳先生、京大の大熊稔先生、慶應大の池田康夫先生等と同門になっていたかもしれない。

私にとっても大きな変化があり、2 年間住み慣れた寄宿舎 Posner Hall が 1965 年度より看護学生の寄宿を拡張するので、寄宿契約の延長は不可能で、引っ越すようにと Educational

Secretary にいわれた。6 月の末からアパートを探し、Back Bay Fens という公園に面している Park Drive 51 のアパートを見つけて引越した。ここは公園を隔てて Musium of Fine Art (有名なボストン美術館) があり、近くに Boston Red Sox の本拠地 Fenway Park があった。このアパートは入り口に番人はもちろん鍵がなく、エレベータはあったが、私の部屋は 4 階にあり、冷房はなく、スチーム暖房つきで、ベッドルーム、キッチン、バスルームがあった。家具付きでベッド、クローゼット、冷蔵庫とコンロは都市ガスであり、電気代、ガス代込みで月 97 ドルだったと記憶している。夏期は大きな扇風機を窓にはめ込み、周りを段ボールで塞ぐという具合であった。Parking space はアパートの裏にあったが、満車のときはアパートの前の道路に十分スペースがあるのでここに駐車することもできた。このような状態のアパートでも当時のボストンのこの辺りは、独身の私にとっては特に治安的に不安はなかった。あまり、他の住人に会うこともなかったが、朝の出勤時や夜間に勤め人風の女性に会うこともあったので、私のみが特に治安に疎かったわけでもないと思う。

9 月の半ばに日本大学内科助教授の天木先生が Prof. Crosby の教室に来られ翌年まで滞在されることになったので、先生の宿舍を御一緒に探して差し上げた。10 月にはボストンの中心であるブルデンシャルセンターの近くに新築されたシェラトンホテルを舞台に Tufts 大学の postgraduate course が開催され、hematology の分野には教室の医師も出席することが許されたので、天木先生や fellow たちと出席した。このとき、どの lecture でも教科書的な話と先進的な話が盛り込まれていた。

このほか Boston blood club や Jimmy fund で行われる講演会が、翌年の春までいろいろな場で行われるので、Mitus 先生や天木先生、fellow たちと出席した。そして、会の前または後に、これらの人たちと一緒に日本食レストランで夕食をしたものである。

11 月に入って体がだるく、なんとなく熱っぽく、咽頭痛が続いた。扁桃腺や咽頭を自分で鏡を使って観察しても炎症は見られなかった。そこで、内分泌教室の Associate Prof. Mead III の診察を受けた。先生は甲状腺部を触診して、私に「なんだと思う」と質問したので、thyroiditis と答えると「そのとおり」と言われた。そこで radioactive iodine uptake 試験を受けた結果、亜急性甲状腺炎という診断で「甲状腺を少し休めるために甲状腺ホルモンを投与する」と言われ、甲状腺ホルモンの錠剤をもらった。しかし、しばらく服用してみたが何やら不安感が強くなり、指に振戦を感じるようになったので、再診を受けて私のような日本人の体重は米国人の平均体重より少ないはずだと訴えて、減量してもらったら、このような症状はなくなった。いずれにしてもその病院で働く医師は医療を無料で受けられたので非常にありがた

かった。ここでも当時の日本（慶應大学）との違いを痛感した。

北アメリカ大停電



この頃の記憶に残った事件は 11 月 9 日に米国北部に広範囲に起こった大停電である。この日夕方仕事を終えてそろそろ帰宅しようかと考えていたときであった。私はまだラボにいたが突然ラボ全体の電気が非常灯を含めて消えた。このときは病院の停電だと思ったが、真っ暗で何も見えない。しかし、まだかなりの医師がラボに残っていたので皆が集まってきて不安はなかったが、一番困ったのが自分のロッカーを見分けることと、さらに鍵穴が見えないのでキーを差し込むことができない。当時はまだ携帯電話がない時代なので皆が困っていた。そのときに廊下の方から灯りがロッカールームに近づいてきたのでちょっと安心したが、間もなくその正体は一人の clinical fellow が紙巻きたばこを吸いながらやってきたのだった。タバコの火が暗闇ではこんなに明るく見えるものだ初めて知った。そこで煙草の火を頼りに一人一人がロッカーから必要なものを取り出すことができたが、研究室のビル全体に灯りがなく、エレベータも動かないし、だれもが階段を使った経験がない。そこで全員が塊になって、この fellow にマッチを擦りながら先導してもらって、階段を 1 階まで何とか降りることができた。ビルの外に出て驚いたのは街灯を含めて灯りというものが全くなかった町中が真っ暗なことだった。しかも、この季節では完全な夜になっていたが、この日は幸運にも満月であったので駐車場の自分車までたどり付いた。さて、自動車をゆっくりと走らせて帰宅しようとしたが、信号灯も全部消えているので、日頃はいくつ目の信号を右折するなど記憶していないので、信号灯のない道を走っていると街角がいくつもあって、曲がるべき街角がわからない。また、信号灯がない交差点を渡るのが非常に危険だったが、幸い皆が非常にゆっくり走っていたので助かった。車のラジオは「停電はボストンだけでなく、広く広がっていて、交通信号は消えているのでドライブには注意するように、また、ハーバード大学の学生がシャツのような白い布を持って、自主的に交通整理をしている」と報じていた。さらに、NY への航空機はフィラデルフィアへ、バッファローへの便はシカゴへと目的地を変えたと報じていたので、これは大規模な停電だと理解できた。そして一番感じたのは戦争ではないかと思った。帰宅してすぐに近くの小さな食料品・雑貨屋のような店に行きローソクと食料を買って帰り、急いでバスタブの栓をあけると、幸いぬるいお湯が出てきたので、風呂に入ったが、その後、水は出るがお湯は出ない状態になった。そして日本から持

参したポータブルラジオに聞き入った。このラジオからはこの停電がアメリカ東北部のみならずカナダ東部にも及んでいることを報じており、さらにホワイトハウスとクレムリンを結ぶ red line はつながっていると連呼していたので、とりあえず戦争のようなものではないと安心した。あたりは非常に静かで、満月が真っ暗な周辺のアパートをこうこうと照らしている窓からの光景は非常に印象的だった。しかし、日本各地がアメリカ軍の空襲にあって戦時中の私の少年時代でも、このように広範囲に停電することはなかったので、戦後 20 年近くたったこの時点での大停電は信じられない感じであった。停電が発生した時間にはまだ手術を行っていた病院も多く、自家発電で続行した病院もあったが、一部では長い間停電には遭遇していなかったため、いざ自家発電機を動かそうとしたら、全く動かず、やむを得ず懐中電灯で手術を続行したという例もあったらしい。やはり危機管理というのはいつでもどこでも重要であると思う。

3 年目の冬から夏



1965 年 12 月の初めに ASH Annual Meeting がフィラデルフィアで開催されたので、2 人の fellow と車をシェアして朝 6 時頃ボストンを出発、昼にフィラデルフィアに到着してすぐ学会に出た。ホテルは Mitus 先生と同室であったが、先生は夜、窓を開けて寝るのが習慣らしく、私は通常窓は閉めて寝るので、毎夜先生が窓を開ける、私が気が付けば閉めるということを繰り返した。4 日目の学会終了後、夕刻フィラデルフィアを発って夜中にボストンに帰った。

その週末には NY へ行った。前月後半の週末に NY Hilton Hotel で行われた Hodgkin disease のシンポジウムに出席するため、天木先生と車で往復したので、今回は一人であることから、車を避けて air shuttle を利用した。あらかじめアポイントをいただいていたので土曜日に Mt Sinai Hospital に Dameshek 先生を訪ねた。病院は central park に面しており、5 番街にある玄関には青いテントのような屋根が突き出ており、制服を着たドアマンが立っていた。雰囲気はまるでホテルのようであった。先生の部屋は重厚な感じであったが、あまり大きくなく、あたりに研究室はなく秘書と 2 人きりという感じであった。先生は私が訪ねたことを喜んで下さった。現況をお話したが、先生もこれからここに医学部を設立するという抱負のような話を下さった後、院内を簡単に案内して下さい。夜は慶應大学内科の恩師三方一澤教授が NY に来られていたので、教授御一行とは NY の高級日本料理店で会食させていただいた。夜 NY からボストンへ、初めて Greyhound の夜行バスを利用することになって

しまったが、乗客層が航空機とは全く違って、思わず緊張してしまった。

クリスマスには Mitus 先生のお宅に天木先生と御一緒に招待され、御一家と静かなクリスマスを過ごした。そのときまだ小さかった Mitus 先生のお嬢様が、後に Hoffman の Hematology Textbook だったかに、執筆者の一人として名を連ねていらっしゃるのを見たときは時の流れの速さに驚いたものだった（写真 14）。

2 月から 5 月まで月に 3 回くらいのペースで Massachusetts Institute of Technology (MIT) で行われる radioisotope の course に出席する機会を得た。これは夕方から MIT で行われて、基礎講義や実地があった。ラボの fellow たちと出席した。このコースで学んだことは後に慶應大学でも役に立った。

この頃には研究の上では、実験的水腎症による赤血球増加症の発生機序に関して、腎臓実質の萎縮の少ない場合には赤血球増加症が発生し、萎縮の程度が強いと発生しないことから、腎実質の血管の状態を腎血管から造影剤を注入してレントゲンで観察すると共に、erythropoietin (Epo) の経時的变化も測定する必要があるために、低圧タンクを利用して、多血マウスを作製し bio-assay 法で Epo を測定することになり、St Elizabeth Hospital の Prof. Stohlman の所へ行って標準 Epo をもらってきた。Stohlman 先生は Mitus 先生が“American greatest hematologist”と評するように、巨大な体軀をもたれ、声は祠の中で話をされているようであるが、親切だった。先生は Dameshek 先生後の Blood の editor-in-chief になられたが、さらに後にエーゲ海上空で航空機テロに遭遇されて亡くなったのは残念である。

5 月の初めに Federation of American Society for Experimental Biology の meeting に出席するため天木先生、Dr. Lorbacher と車で Atlantic City, NJ へ行った。Prof. Crosby に



写真 14. 天木一太先生（左）と Dr. Mitus 一家のクリスマス会

なっても現地のレストランでのパーティは踏襲された。帰りに NY で日本に帰国される天木先生とお別れした。

1966 年 6 月 1 日から 3 日まで New York Academy of Science 主催の “Erythropoiesis” のシンポジウムが NY 市の名門 Woldorf Astoria Hotel で催され、Mitus 先生も参加することになり、私が行っていた実験的水腎症による赤血球増加症の仕事の第 4 報を発表することになった。この仕事は赤血球増加の原因は、腎臓実質の血流の障害が erythropoietin 産生の増加を招くことを示したものであった。日本からは演者として東京大学第 3 内科の高久史磨先生ただお一人が招待され、発表も堂々としておられ、感心した。このホテルで高久先生と初めて個人的にお会いして、先生の部屋で旧友のシカゴの先生方にも紹介していただいた。高久先生からシンポジウムのあとボストンを訪ねるからといわれた。その次の週のある日の午後に先生が約束どおり New England Center Hospital に来られた。先生にラボをお見せしたとき、低圧タンクで多血マウスを作成する機会に、追加輸血のための採血の方法が効率良く行かないので、先生にお教を乞うたところ、先生は気楽に引き受けて下さって、上着を脱いで実地に教授して下さい上、先生の研究室の電話も教えて下さった。この御親切は忘れられない。その後先生とビールを飲んでいろいろお話しをした。夕方、NY へ帰られる先生をボストンの south station まで車で送りした。このときの縁で、帰国後、私は先生に何かとお世話になることになった。

1966 年 6 月 21 日火曜日は本当に思い出深い日になった。この日はほぼ 1 年ぶりに Dameshek 先生が New England Center Hospital にこられ、この年度で Tufts 大学の教授も辞して本格的にボストンを去られることになったので、Dameshek 先生と Crosby 先生以下その日いたラボの全員で病院の Bennet St に面した玄関で写真を撮った (写真 15)。その後、先生は部屋にこもって何かしておられた。午後、秘書さんが皆に先生の署名入りの御自分のポートレイトを配ってきた (写真 16)。今日が先生の New England Center Hospital 最後の日になるのだと気がついて、我々が御挨拶をしようと部屋にかけつてみると、すでに先生は誰にも気付かれずに長年仕事をされた部屋を去られて、腰掛の上に Professor William Dameshek と書かれた名札のついた白衣のみが残されていた。

あとがき



米国留学は私の人生に非常に大きな影響を与えた。当時の日本とあまりにもかけ離れた生活環境、研究室や病院の設備と医師の生活などを経験したこと、さらに、いろいろな人とかかわって



写真 15. 1966 年 6 月 Prof. Dameshek と Prof. Crosby と Hematology 医師全員

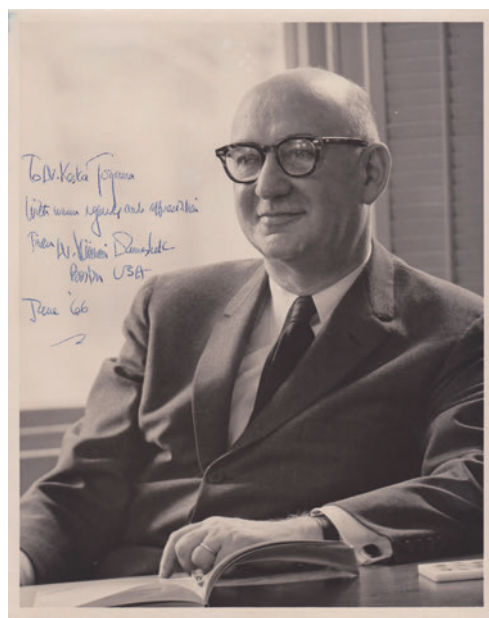


写真 16. Prof. Dameshek から 1966 年に戴いた署名入り写真

学んだことは、私にとって貴重な財産になった。特に、Prof. William Dameshek の下で hematology fellow として働いたことは大きい。Dameshek 先生は偉大な臨床血液学者で、種々の疾患患者を注意深く観察し、病態を解明し、新しい治療を実行され、真に evidence based medicine を実践された方である。さらに、先生は American Society of Hematology の設立と発展にも寄与された。現在 ASH の発展を見ると Dameshek 賞の存在する意義は大である。